

冬春栽培キュウリにおける薬剤耐性褐斑病菌の発生実態および ボスカリド耐性菌の簡易検定法の開発

山崎 睦子・岡田 知之

Occurrence of Fungicide-Resistant Isolates of Cucumber *Corynespora* Leaf
Spot
in Greenhouses and the Development of New Detection Methods for
Boscalid-Resistant Isolates

Mutsuko YAMAZAKI and Tomoyuki OKADA

要 約

高知県内の主要な冬春キュウリ産地において、キュウリ褐斑病菌の数種薬剤に対する耐性菌の発生実態を調査するとともに、近年発生が増加しているボスカリド耐性キュウリ褐斑病菌の簡易診断方法についても検討し、以下の結果を得た。

1. 施設栽培キュウリ3圃場で2013～2015年の3年間調査したところ、ボスカリドに対する耐性菌が高い割合で発生しており、その耐性レベルはボスカリド剤の使用の有無により変動する可能性が示唆された。アゾキシストロビンおよびチオファネートメチルに対しては、当該薬剤の使用の有無にかかわらず、全てが耐性菌であった。ジエトフェンカルブに対しては、感受性菌、弱耐性菌、中等度耐性菌が発生したが、それらの発生と薬剤の使用履歴との関係は不明であった。一方、プロシミドンに対する耐性菌は、当該薬剤の使用があつたにもかかわらず、いずれの圃場とも認められなかった。また、ボスカリド、アゾキシストロビン、チオファネートメチルおよびジエトフェンカルブに対して複合耐性を示す菌株も確認された。
2. ボスカリド耐性菌に対するボスカリド水和剤の防除効果は、感受性菌の1～6割程度に低下していた。アゾキシストロビン耐性菌に対するアゾキシストロビン水和剤の防除効果は低く、チオファネートメチル耐性菌に対するチオファネートメチル水和剤の防除効果には菌株による差がみられた。一方、ジエトフェンカルブ耐性菌に対しては、プロシミドン・ジエトフェンカルブ水和剤、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤とも防除効果が高かった。
3. ボスカリド耐性菌の発生を確認するための簡易診断には、罹病葉に薬剤添加培地を直接スタンプする培地検定法が有効と考えられた。また、県内で採集されたボスカリド耐性菌に認められる *SdhB* 遺伝子に特有の変異を認識して制限酵素で切断する PIRA-PCR 法も有効と考えられた。

キーワード： キュウリ、褐斑病、*Corynespora cassiicola*、薬剤耐性菌、簡易診断